水をあふれさせる

津守　真

前回、「遠くを眺める」に記したM郎の話しのつづきである。

中断される生活

M郎はこの頃うろうろ歩くことが多く、何をしていいのかよく分からないでいると母親が言う。学校でも、一通り課題をこなしていても自分を打ち込んでやることがない。当時、私共の学校でも、とくに小学部では課題が多く、自分で何かをしていてもじきに中断されて、与えられた課題をせねばならないことがしばしばであった。M郎

は誘われるとすぐに立って行くのだが、少しやると窓際に行き、遠くを見ている。また、籠をひっくり返したり、絵本を引きずり降ろす。M郎は何かをいわれて中断せねばならないことが多かった。自分から外にゆくこともできず、一日の生活は不自由なものだったろうと思う。

私はM郎が気になっていたので、つとめてM郎のそばで過ごした。M郎も私を見るとすぐに近寄ってきた。ある日いつものように、M郎は私の傍らに座り込み、棚のおもちゃ籠をひっくり返した。白い小さな球を手にとって、それをずっといじっていた。私が凹みのある容器を渡すと、受け取って白球をいれた。ポスターカラーの空びんに白球をいれたとき、白球に色がついた。その色をとろうとしてズボンでこする。身体は私の膝にしっかりと触れていて、私が動くと、すぐに引き留める。こうして一時間以上を過ごした私は、M郎はこういうゆったりとした時間を必要としているのだと思った。

私にもこういう時間をこれでいいと思えないときがある。この子は小学部だから、もっとレベルが高いことをしていいはずだと考えているときである。本気で取り組むことがなくても、クラスの課題の中でうろうろしていれば小学部らしい生活をしているように見える。だが、ゆっくりと時を過ごすことをこの子は望んでいるのではないか。つまり、子どもには場所と活動を選ぶ自由があっていいのではないか。また、

時間を選ぶ自由もあっていいのではないか。そのとき、子どもらしい世界がそこに実現される。私は、あるとき、クラスの担任たちとこのことを話した。担任への批判になるのではないかを恐れたが、思いきって提案することによって私共の人間関係も開けたと思う。ひとりの職員はこの頃M郎の心は死にかけていると言った。

籠をひっくりかえす

秋の一日、私は朝からM郎のそばにいた。M郎は二階の奥の部屋で、タオルケットにくるまって、レールやブロックをいじっていた。私はできるだけM郎の傍らにいようと思っていた。そして私が彼の望みを叶えようとしていることを知ってもらいたいと思い、そこに腰を据えて留まった。そういうとき他の大人がちょっと見に来ては去って行くのも、課題に誘いにきたように感じられることが分かった。そうなるとその大人は親しみある存在ではなくなる。M郎は次第に私によりかかってきた。私がちょっと姿勢を変えると腕を引っ張って引き寄せる。こうしている間に、M郎について分かったことがあった。金属の容器やままごと容器に丸い玉や球形の物をいれてカラカラ、コロコロ、リンリンと音を出すのを好むことである。ここに彼自身の興味がある。

数日後、M郎は鈴を手にもっていたので、私は容器のなかに鈴をいれてセロハンを

はり、ビニールテープを貼ろうとした。私がやりかけると、M郎がすぐに手を出してほとんど自分でやる。透明の容器に鈴をいれテープでとめると、よろこんでそれをいじっている。私が立ち去るとM郎もついてくる。音と造形の結合である。

片付けてあって困ったわね

朝、学校に来たとき、おもちゃ籠が片付けてあった。母親が、あら今日もがらくたが片付けてあって困ったわねと言った。M郎がおもちゃ籠をひっくりかえすのは、気にいる物を探していることが母親には分かっている。教室にゆくと、M郎は毛布をかぶっている。私がかたわらに座り、声をかけるとすぐに毛布をとり、顔を出して私を見た。私が立ち上がると、私を追うように部屋の中を歩き、自分の顔を叩いた。

水をあふれさせる

M郎は私を見てにこっと笑って私のところに来た。『ながし』で水道の水を出した。私はM郎が積極的に水遊びをしていい具合だと思っていた。するとM郎は手近にあったミニカーやがらくたを『ながし』に投げ込んだ。『ながし』に水がたまるように排水口をふさぐためだったことが後になって分かった。水が『ながし』の外にまであふれ出た。私が水を流そうとすると腕を張っていじらせない。水が床に流れ出し

た。他の職員や実習生たちが水をかき出すのを手伝ってくれた。やがて水があふれる。縁から滝のように、そしてゴム敷の切れ目から滝のように。地下には倉庫があり、地下室の天井にもビニールシートを張らなければならない。こうなると、『子どもに即して』と言っていられず、結果の処理に追われる。M郎にとっては水を外にあふれさせることに意味がある。私が水を止めようとすると手で顔をバンバンと叩いた（これは自傷行動とよばれるが、これは状況から切り離してその子の特性とする見方である。こういう行動にはかならず本人の理由がある）。

次の日、門から入ってくるところに私がいたが、M郎は私を見ない。母と二階に行く。二階に私が近寄ってもすぐには来なかった。プレールームの隅に行く。私はしばらく椅子に腰かけていたが、M郎はすぐには寄ってこない。それでも私が立つと手を引きに来る。

そのうちに『ながし』の水道の水を出した。私はすぐにゴム敷を用意する。M郎はポスターカラーを水の中にたらす。水が緑色とそして黄色に染まり、渦を巻いて排水口に流れ込んだ。やがて水があふれる。縁から滝のように。私が床に雑巾をおくとM郎は手でとりのける。その水が流れ込む様が良いらしい。実習生たちがモップで拭きとり、ちりとりで水をかき出してくれた。私がいろいろと言っても役立たなかった。M郎は黙々とやり続けた。一時間以上やっていた。

この日、保育の後のミーティングで、次のようなことが話題になった。

1　M郎は水を滝のようにあふれさせる。枠から外に水を出すことに意味がある。不自由な生活の枠を出て、心の内から湧く能動性を求めているのだろう。

2　私ははじめM郎が水をあふれさせたとき、あわてた。水が洪水にならないためにどうしようかと必死になり、M郎が何をしようとしているのかという視点は忘れていた。他の人たちの協力により、水をかき出し終えたとき、はじめて私はM郎の立場に立つことができた。

3　水が『ながし』からあふれたとき他の人が快く手伝ってくれた。だからといって、無条件にやらせていいとは私には思えなかった。歯止めをどこにおくかは依然として問題であった。

4　私とM郎だけが使う場所ではないから、他の人の立場での了解と協力が必要である。

5　職員たちは、この学校は管理を優先させず、最大限に子どものことを考えるのであることを全員で了解しておくことが必要であると言った。皆も葛藤の中で、方向を間違えないようにしようとしていることを知って私は励まされた。

私共の中には共通理解はありながらも共通の苦しみの数週間であった。後始末の共同作業をしながら、私共の共通理解は深まったと思う。

数週の後

朝、M郎は部屋の隅で毛布をかけていたが、にこにこしていた。担任が粘土を板に乗せてもってゆくとそれを四十分くらいいじっていた。こんなことは久しぶりだった。

M郎は『ながし』の水を出すとそこを立ち去った。立ち去ってもじきに戻ってきて水道が止められていないのを確かめる。何度もいったり来たりする。水に口を付けては口から水を吐き出す。それを何度もやった。私がM郎と同じように水に口を付けるとそれを見て私に顔を寄せ、にこっと笑った。M郎のこういう笑顔を見たのも久しぶりである。私がまたやると、顔を見てにこっと笑う。こうしながら、滑り台を走り上ったり、にこにこして走り回った。

もしも、M郎が去ったときに水を止めたら、私はM郎よりも管理を考えていることになる。私がM郎と同じように水に口をあてたのは、M郎のすることに価値を認めたいと思ったからである。私はM郎と快く過ごすことに価値をおきたいと思った。M郎は自由感をもって能動的になった。

M郎が私の手をひいた。滑り台を下から上って来るところを上で迎えるとケラケラ笑った。手を引かれ、あっちにいきかけたり、こっちにいきかけたりする。どちらに

いってもいいよというようにM郎と一緒にいると、どっちに行くかは自分が決めるんだという彼の心の自由感が伝わってくる。滑り台で相手をしているときも、その自由感に支えられて、笑いがあるように思った。

半年の後

M郎はみどり色の大きなセロハン紙をかぶって歩いていた。とれそうになるとセロテープで貼って帽子のようにすることを頼みに来る。私が追いかけるとケラケラ喜ぶ、私がキスするとケラケラ笑う。何度もやって欲しがる。梯子を渡り途中から飛び降りる。また私にキスしてもらって笑う。雨の中、庭の水たまりに裸足で入り、波を立てた。M郎にとっては海辺であり、池なのだろう。